

ドイツ人による反ナチス抵抗運動の系譜のなかでも「ハンベル事件」はひととき異彩を放つ。1940年、ナチス・ドイツのフランス侵攻に沸きたつベルリンで起こった。平凡な労働者階級のオットーとエリーゼのハンベル夫妻は、エリーゼの兄弟の戦死を機に、ヒトラーとナチスへの抵抗を呼びかける葉書を書いては、公共の建物など市内各所に置くという活動を始める。ふたりは42年に逮捕され、翌年ギロチンで処刑された。事件に関するゲシュタポの機密文書を中心に、第2次世界大戦終結直後、ドイツ人作家のハンス・ファラダが小説としてまとめたのが『ベルリンに一人死す』(赤根洋子訳、みすず書房)である。7月8日から全国順次公開される『ヒトラーへの285枚の葉書』は、ファラダの小説を映画化したものだ。

ヴァンサン・ペレーズ監督は、およそ10年前、小説のフランス語版をたまたま読んで映画化したいと強く思った。

「私の母はドイツ系で1939年に生まれ、国外に脱出して各地を転々としたのちに戦後ドイツに戻ってきたんです。そういう母のもとで育つなかで、子どものころからいろいろ疑問をもっていました。ナチス時代のドイツ人はどういう思いで生きて

いたんだろうとか、ナチスと闘うことは可能だったのだろうか、もしそうならどんなやり方か?、といったことです。小説から教えられたことはたくさんありますが、まずはドイツ人の間に蔓延していた恐怖の感覚ですね。いま私たちが当時をふり返るとき、『ナチスの脅威がヨーロッパを覆い、ひいては世界中を震撼させた』というような見方をするでしょう。でも、ナチスがいちばん最初に破壊したのはドイツなんだと、視座を転換させられました」

### 監督の親族も ガス室の犠牲に

脚本執筆に着手するのと前後してリサーチを始め、図らずも、それまで知らなかった親族の去就を知ることになった。映画の冒頭、オットーとアンナのクヴァンゲル夫妻(ハンベル夫妻の劇中名)の息子が戦死する。ここには、ロシア戦線で17歳で死んだ母方の叔父を重ね合わせている。

最もいたましかったのは、やはり母方の大おじの最期だ。ナチス優生学思想によって、精神病患者や知的障がい者らを「安楽死」させるといって「T4作戦」のために、ガス室で殺されたのだという。

「ボーンに近い、ドイツ中西部のハダマーにあった精神病院とガ



インタビュ

マイアム・アム・ゾグアが

### 『ヒトラーへの285枚の葉書』

2016年/独・仏・英/103分  
7月8日(土)より、東京・ヒューマントラストシネマ有楽町、新宿武蔵野館ほかで公開。以後、全国順次公開。

©X Filme Creative Pool GmbH / Master Movies / Alone in Berlin Ltd / Pathé Production / Buffalo Films 2016

## 『ヒトラーへの285枚の葉書』の ヴァンサン・ペレーズ監督に聞く

### 実在のナチス抵抗運動に基づく小説『ベルリンに一人死す』が映画化

ス室跡を訪れました。大おじは、その精神病院に入れられていたのです。そこで電気ショックを施され、脳に回復不能な損傷を受けてしまったらしい。そうでなくてもあのころ、いったん入院させられたら、退院の可能性はほとんどなかったと聞きました。ガス室は病院の地下にあって、ほぼ当時のまま保存されています。その中に入ってみました。遺体の焼却炉も見ました。犠牲者の記録簿があつて、大おじだけでなく1万5000人ぶんのそれに目を通しました。もう、言葉にしようがない……。

この作品は当初、資金がなかなか集まらなくて難航したんです。それが着想から完成まで10年もかかった理由のひとつですが、ハダマーに行ったことで、なんとしてでも実現させようという力を与えられた気がしました。私の親族だけでなく、犠牲者になったすべての人びとを忘れないために」

その目処がつくきっかけは、初版から60年を経て初めて刊行された英語版がベストセラーになったことだ。それは世界市場を相手にする普遍性とスケールをもつ作品に仕上げるべきだという示唆にも感じられ、ドイツ語での制作から英語のそれへ切り替えた。原作が長大なだけに脚本化も悩んだが、クヴァンゲル夫妻を主軸にしたのは、その

運動の同時代的価値をラプストリーを通じて描けるからだっ

た。「主演のエマ・トンプソンやブレンドン・グリーソンをはじめキャストの演技が素晴らしいのは、献身的にといえるほど打ちこんでくれたからです。それは、この物語がこんにちでも、たいへん重要な意味合いをもつからにはかなりません。世界のあちこちで極右勢力が拡大しているいま、そういう思想や政策が何をもたらすのかを描くことが大切だと、この映画に携わっただけでも感じていました」

## いつしか操り人形に

主要キャラクターのひとりに、葉書事件を捜査するゲシユタポのエッシャリヒ警部がいる。演じるドイツ人俳優タニエル・ブリュールは、監督とともに出演したテレビ番組でこういう発言もしている。「難民問題からしてすでにドイツを変えている。リベラルを自認していた人間がもはやリベラルじゃない。(排他思想や右翼思想という名の) 毒素がゆっくりまわり始めている。ドイツ全体に、欧州全体に。危険な兆候だ。警戒すべきだよ」『Deutsche Welle (ドイツエウエレ)』(2016年9月3日付)。

「エッシャリヒは私にとって興味深い人物で、それは彼がどこ

にもいるふつうの人間だからです。昔かたぎの実直な捜査官で、内心ではナチスをきらつていて、しかし職務上やむをえず体制に適応しようとするんですね。その結果、無実の被疑者をそうと知りながら射殺する。うわべだけ合わせているつもりがいつし

大統領は私の息子を殺した  
あなたの息子も  
殺されるだろう

ヒトラー政権では  
暴力が正義に勝る  
加担するな

か操り人形になり、さらにはこれらの同類になってしまふ。いまの世の中でもこういうことはよくありませんか」

劇中で映しだされる葉書の一部は、ベルリンの博物館に保管されている現物のレプリカだ。「映画のなかでゲシユタポ捜査官が言っているとおり、文面はどれもナイーブといましようか、高等教育を受けた人間のそれではありません。けれど、どんなに小さくても、抵抗の手段としてふつうの個人にできるこ

Vincent Perez

1964年、スイス・ローザンヌ生まれ。ジュネーブで演劇に興味をもち、フランスに移って国立高等演劇学校などで学ぶとともに舞台のキャリアを積む。80年代半ばから映画界へ入り、『シラノ・ド・ベルジュラック』(90年)や『インドシナ』(92年)、A・デュマ原作『王妃マルゴ』(94年)などの大作で注目される。さらに『THE CROW/ザ・クロウ』(96年)で米国ハリウッドに布石を打ち、2000年代には監督業にも本格進出。東野圭吾原作の日本映画を、米国テレビドラマ『X-ファイル』で知られるデヴィッド・ドゥカヴニー主演でリメイクした『秘密 THE SECRET』(07年)などがある。合わせて、ボリショイ・バレエのダンサーを撮った写真展をモスクワほかで開催するなど、スイス時代から関心の高かった写真家としての活動にも力を入れている。

ナチに反対する者は  
戦争マシンの  
砂になれ

## 境分 万純

とはあったということですよ。ね。たたき上げの職人らしいオットーが言う、戦争というマシーン(機械)に砂を投げこむというかたちで。動いている機械に砂をひと粒投げこんだところで何も起こらない。けれど、どんどん砂を投げ入れ、それが溜まっていくと、いつか機械は止まる」

憲法改悪阻止であれ、反原発運動であれ、冤罪事件であれ、社会問題に取り組みとうとする個人の前に立ちはだかる「敵」は、しばしば強大である。クヴァンゲル夫妻にもそういうときがあったように、自分のやつっていることに意味があるのかと疑問を感じたり、手ごたえのなさに疲れを覚えたりすることもないわけではないが。

「未来を決めるさすがは、私たちひとりひとりの手のなかにある。それを決して他者の手に委ねようとは思わないことが肝心です。クヴァンゲル夫妻がそうだったように、傍目にはかれらの活動はバカげたものに見えるかもしれない。しかし何よりも重要なのは、ふたりはその信念なり真実を生きたということです。そして時代を経てみれば、かれらは正しかった。真実はいつか必ず現れる。本作の結末にはそういう意味をこめています」

人物撮影/石郷友仁

ささこ ますみ・ジャーナリスト。